
献 辞

佐 藤 達 郎

(英文学科長)

三神和子先生は、昭和三十年に豊明幼稚園入園以来、豊明小学校、日本女子大学付属中学校及び高校、同大学、同大学院修士課程へと進まれ、本学の教員としては、平成二年四月に助教授として着任、その後三十年余り英文学科のイギリス文学担当教員として中心的な役割を果たされた。三神先生が、豊明幼稚園に入園された昭和三十年といえ、日本国内では、五十五年体制が確立し、イギリスではウィンストン・チャーチル首相が引退した年である。第二次世界大戦の余波が次第に収まり、日本の高度経済成長が始まった時期から今日に至るまでほぼ六十年間、先生は、日本女子大学あるいは付属校園に通い続けられ、その生涯を本学とともに歩まれたことになる。

教育面では、卒業論文の指導はもとより、イギリス文学史、イギリス小説演習といったイギリス文学分野の主要科目を担当されるとともに、大学院では博士の学位取得者を育てられ、公務にあっては、学科長、大学院文学研究科委員長、学内理事、総合研究所所長などの要職を歴任された。そのようなご多忙の中、先生は研究においても精力的に活動された。二十世紀イギリスの女流作家キャサリン・マンスフィールドの作品を研究対象とされていたが、そのご関心は次第に拡大し、十九世紀から二十世紀イギリスにおける女性運動、児童文学、現代オーストラリア・ニュージーランド文学にまで及んでいる。平成十二年には、単著『キャサリン・マンスフィー

ルド——世紀末、モダニズム、芸術家』を上梓、その後も、ビアトリクス・ポターの政治活動、ケリー・ヒュームの『ボーン・ピープル』に関する考察、シャーロット・デスパード論など次々と貴重なご論考を発表され、平成二十五年には、ニュージーランドのウェリントンで開催された国際マンスフィールド学会において、マンスフィールドの短編“A Cup of Tea”に関するご論考を発表された。このように国内外で多岐に渡る研究成果を発表された先生であったが、それらの考察の背後には、一貫してマイノリティに対する繊細な眼差しがあることも見逃してはならず、そうした視座は、研究のみならず、先生の教育面や学科運営にも確実に反映されていた。

雑司ヶ谷のご自宅から半世紀以上も本学に通われた先生にとって、女子大学という空間はご自身を育んだ生活世界であった。そのような先生にとって、少子化に伴う大学の現在の状況はまことに厳しく、ご心配の種は尽きないかもしれない。そのご懸念を払拭し、これまでのご貢献に報いることが英文学科一同の大きな責務であることを、先生のご退職を控えた今、いまさらのように痛感している。先生のさらなるご健筆とご健勝をお祈り申し上げるとともに、今後も英文学科をお見守りくださるようこころよりお願い申し上げる次第である。
